

---

# たとえそれが汚く壊れた物でも

三犬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

たとえそれが汚く壊れた物でも

### 【Nコード】

N2041W

### 【作者名】

三犬

### 【あらすじ】

人類最後の戦争で滅んだ文明。そんな時代の名残を回収しては売っていた青年。

ある時彼は、かつての街で奇妙な機械を見つける。

そしてそれはこう言った

「新しい入居者でしょうか？」

ガタガタガタ、と音を立てながらバイクは道をゆく。今後の事はあまり考えぬように、

そう努めながらひたすら走らせる。周りは荒野。荒れ果てた大地とぼつんとさびしげにたたずむ建物の名残のみが僕の視界にあるものだった。

焦燥感に似たえもいわれぬ感情を飲み込み、押さえつける。もう緊張をする事も無ければ、手も震えたりなんてしない。しかし慣れる事だけは決して無かった。汗は書いているし動悸もする。しかし僕にできることはバイクをただ走らせること。そんな僕を乗せている相棒もまるで考が分かっているかのようにただ走り続ける。

最終戦争。人々はそう呼んだ。国が、人々が互いに譲れぬものを押し通そうとし、殺しあい、傷つけあい、ミサイルを撃ちあつた。その結果が目の前に広がる荒野。国家という概念が消滅した世界だった。全くとんだ遺産を押しつけられたものだ。

そしていくばくか後僕は目的地へたどり着く目的地。遠目にはゴミやガラクタの類が壁のように積まれ、城のような大きな門と砦のように大きな櫓が見て取れた。無論見た目だけではなく、確かにそこは街であつた。かつて人々が住んでいたころは、だが。

バイクのエンジンを止めると途端にガソリン臭い相棒はだんまりを決め込む。僕は荷物の中から一丁の拳銃を取り出す。年代物だがまだ現役である。そして探索の準備を始める。弾をマグにいれ、装填し、スライドを引く。銃は発射可能な状態になり、僕もそれはいつでも撃つ事が可能となつた。食料、テントは要らない。ただ少しの水と得物だけをもつてかつての街へと侵入する。失礼、ちよつとはかし荒らさせて頂きますよ。僕は足を踏み入れた。見えない境界線の向こうへ。ここからは、何があるかは解らない。

少しずつ慎重に歩みを進める。人々で賑わい、露店が並び活気と

生のエネルギーに満ちていたかつての大通り。その面影は今ももう無く、風化した瓦礫が僕の足元に転がっているだけだった。銃をしっかりと構え、周囲を勘ぐりながら奥へ奥へと向かう。そうすると数十分、ようやくとよさげな建物を見つけ中に入る。そして僕は金になりそうな物を探し始めた。そう、僕は過去の文明の残滓を集めては売る事で生計を立てていた。この街へ来るのは三度目だった。一度目に野盗と遭遇したが、危険を冒してでも持ち帰るべき物がごまんとあった。だから今でもこの街は僕の狩場だった。鍋、ペン、浄水器、本、武器、何だかよくわからない機械、そう言った物が僕の持ち帰るべき対象であり、明日の食事のための金にもなった。

しかしもうこの街は掘り尽くされてしまっているようだった。数時間の探索でも金目の物はほとんど得られなかった。もうすぐ日が落ち、街は夜の闇へと塗り固められるだろう。そうなったら危険だ。僕は次の建物を探索したら帰る事にした。ここはもう駄目だな。そう思いつつもあと一か所だけみて見る事にする。

\*

「お前は何だ？」僕は銃を構えつつ尋ねる。目の前には半透明な人間らしき者の姿があった。

「わたしはバンドルです」

「バンドル？」

「機種および型番をお尋ねでしたら。バーンズテック独立型都市・固定型バージョンMSAC-2038です」

何を言っているか理解が出来なかった。文明の遺産それもあり高度な物と思われたが、下手な行動するとどう転じるか分からず。

ただ銃を向けそれと会話するしかなかった。

「新しい入居者でしょうか？」

「入居者？ここに人が居るのか？」

「ええ、現在の人口は三万四千七百九十一人です。」

とても言っている事が信じられなかった。この周辺には集落はおろか人の住める場所すら無いというのに。それにそんなに多くの人

口の都市が存在すること自体、今の時代ではありえない事だった。

僕は道化に騙されている気がしてきた。しかし、仮にこいつの言っている事が本当だとしたら、それはすなわち僕の仕事場が拡大することになる。そこが廃墟であるなら探索すればよいし、そこが完全な機能を持った都市であるならサルベージした物を捌けるではないか。よしこいつに案内させよう。僕は決めた。

「人が居るなら案内してくれないか？」

「かしこまりました。ただし警備規約第三十二条により危険物ならびに、強磁性体の持ち込みは禁止されております」

「ここに置いて行けと言うのか？」

「一時的にお預かりさせて頂きます。右手のボックスにお入れください」

見ると箱の蓋が開いていた。僕はしぶしぶ銃をそこに入れた。

「ではこちらにどうぞ」

バンドルの横の壁がスライドし、中に筒状のちょうど僕がすっぽり収まるくらいのサイズのカプセルがあった。これに入れというのだろうか。みたところ乗り物のようだが。

「危険は無いんだろうな。僕を危険な目に合わせようと企んではないか？」

「そのようなことをするメリットがありません。それに周囲10kmにはあなた以外の生物の痕跡は確認できません」

驚いた。こいつ生体スキャンの機能を持っているようだった。大きな集落にあるか無いかの代物なのに。これはおもしろい。ひと儲け出来そうであった。バンドルが案内する先にはひょっとして過去のテクノロジーが残っているのではないか。僕はそのことばかりに気を取られ、冷静な心を失っていたのかも知れない。

カプセルの中に入る。すると入口が閉じ物前に文字が浮かび上がってきた。

生体認証…… スキャン中 異常無シ 危険物の所持確認デ

キズ

転送シーケンス開始

辺りが、光に包まれた。

\*

「もう一度聞く。お前は何者だ！」小奇麗な衣装に身を包んだ男が怒鳴りを上げる。

「だから、僕はスカベンジャーだと言っているんだ！」負けじと声を張り上げる僕。

「スカベンジャーなどというのはこのバンドルシティには存在しない！おまえはどこからの流れ者だ！？」

堂々巡りだった。僕はなぜこの髭面の男と子供の喧嘩にも満たない事を繰り広げているのだろうか？僕は思い返す。

それは驚きの連続だった。

一時的に気を失っていたのだろう。僕が目を覚ましたのは木々が生い茂り、花壇があり、小鳥がさえずる静かな公園だった。緑の木を見るのは生まれて初めてだった。集落のちかくには萎びた焦げ茶色の大きな「木」が立っていた。緑の瑞々しい葉と、太く立派な幹を持った木々。それは老人の口から語られる話の中の産物であった。それだけでも十分僕を驚かせたがそれだけでは無かった。まわりを見渡すと、天を貫かんとそびえる建物と沢山の人々が行き交う通りが目に入った。これはすごい！ガラス張りのピカピカの建物。道を埋めつくさんとする人々。何もかもが新鮮だった。始めて見る光景に心を躍らせる。この街には最終戦争なんて無かったのだ。バンドルとかいう奴の言うとおりここには生きている街が存在するのだ。ただ毎日を緩やかに死につつある所から、発展し明日へと向かって邁進する、そんな街に僕はやってきたようだった。これはすごい！これはすごい！ただそう思えばかりだった。そうだ、ここ以外の場所も見たい。

そして僕が公園を離れようとした時だった、奴らが来て僕は捕まった。「ボロボロの服を着た浮浪者がいる」そう通報があったそう

だ。その後僕は髭男と対面することになったのだった。

どうやらこの付近にはスカベンジャーとして生計を立てている連中は存在しないようだった。それもそうだ、この街は生きている。文明の遺産なんてわざわざ拾ってくる必要が無い。しかしこのバンドルシティという街は一体どこに位置しているのだろうか？僕はあの乗り物でどこまで連れてこられたのだろうか？そして一つ気になる事があった。この街には空が無い。あの灰色に曇った空が、戦争の影響で舞い上がった粉塵に覆われている空が。つまりここは地下ないし大きな建物の中に作られた街だと推測出来る。

僕は文字通り叩き込まれた独房で一人考えていた。先客は隣の独房にいたが、寝ているようで現状を聞く事は出来ず、一人で物思いにふけていた。

しかし、現状で出来る事に限りがある。運ばれてきた食事を食べながら考える。なかなか旨い。隣の先客には食事は運ばれて無いようで、監視の目を盗んで接触を試みた。大方酷い事をしでかして、食事を抜かれたのだろう。すこし分けてやって恩を売っておくのも悪くは無かった。

「おい。起きろ」僕は声をかける。

しかし彼、いやおそらく彼女だろう、は微動だにしない。

「ちよつと聞きたい事があるんだ。起きてくれないか」すこし声量上げるが一向に起きる気配は無かった。しょうがない、また今度にしよう。今回は諦めることにした。

そこにちようど監視の男が戻ってきたので声をかける。

「なあ、隣の彼女は何で捕まったんだ？」

男はいぶかしむような目で僕を一瞥するとゆっくりと口を開いた。  
「そいつ、死んでるぞ」

それは確かに死体だった。彼女は死んでいた。確かに死んでいた。

その日の夜の事だった。

「ねえ、あなたここの人間じゃないでしょ」声をかけられ僕は目覚める。

「誰だ、誰かいるのか」と僕。

「あなたの隣の独房よ」と女の声

片側は壁だった。つまり……この声は

「あなたには、死んでいるように見えるのかしら。視覚素子が壊れているから解らないんだけど」

それはとなりの死んでいるはず女だった。

「お前は、生きているのか」

「ええ、もちろんよ。ただし体は使い物にならないけどね」死体そのものではないか。

「この人間ではないと何故分かった？」

「……勘よ。私そういうの得意なの」

この女は何が目的なのだろう。そもそも明らかに死んでいるように見たのに、どうして僕に語りかけてくるのか。これは幻聴ではないのか。そもそも何故死体を独房に入れ続けているのか。いろいろな問いが僕の頭をかけ回る。

「何か、用があるのか」

「ねえ、ここから一緒に脱走しない？」

「何だつて。……手段があるのか」

「もちろん。ただし私はもう体が使い物にならないのは見てわかるでしょう。だから私を運んでほしいの。それが逃げる方法を教える条件よ」

願っても無い事だった。このままここにぶち込まれても何も進展しない。それに、この街は何処かおかしい。何故かそう思う。帰らなければ。何処へ？そう、行かなければ。直感がそう叫ぶ。

「わかった。協力する。どうすればいい」

\*

轟音、爆発。壁が吹き飛ぶ。鳴り響くサイレン。スプリンクラーが狂ったように水を撒き散らす。それを尻目に建物を飛び出す。

「すごい威力だ。何だこの銃は」

「そんな事あとにしないさい。セーフガードが飛んでくるわよ」銃



にインストールされた彼女が言う。

彼女が出した条件。それは彼女自身の人格を銃に保存し運べ、というものだった。人格をまるで死体状態だった彼女から取り出し銃へと移す。しかしこの街の技術発展ぶりには驚かされてばかりだ。まさか人格を保存できる技術が完成しているとは。まるでこの場所にだけ戦争は訪れず、時はそのまま流れているかのようなだった。驚くにも疲れてきた

そして彼女から渡されたこの銃。素晴らしい物だ。大型拳銃程の大きさだが、威力は自由に調節でき、壁を吹き飛ばすなんて事も造作もなくやってのける。

「来たわ、セーフガードよ。もたもたしているから……」

路地から数体のロボット兵士が現れる。

「直チニ、武装解除セヨ」抑揚の無い声で投降を呼びかける。

それを無視し、奴らに向かって銃を向け、引き金を引く。『ギン！』という金属を引き裂いたかのような音と共に光弾が発射された。セーフガードの一体が火を吹いて爆散する。

発砲に対して安全装置が解除されたのか、それを皮切りに奴らも反撃を開始した。手近な物陰に体を隠す。

「それで、どこに行けばいいんだ？」発砲しながら彼女に聞く

「市庁舎に向かうわ。とりあえずこの場を脱して、身を隠して。

話はそれからよ」

顔面近くに相手の射撃が着弾する。今まで相手にした事がある夜盗何かよりもよっぽど正確な射撃だった。

「相手にしてもらえない！どうにか脱出できないのか？」このままでは追い詰められる。

「貸して」銃が勝手に動く。彼女が動かしているのか？

『マナーモード解除。最大出力』液晶にそう表示された。

建物の壁に向かって発砲、ビルが大きく吹き飛ぶ。僕とセーフガードの間に瓦礫が落ち、粉塵が舞い上がる。

「今よ、走って」

奴らとは反対方向へ逃げだす。そして目に付いたマンホールから地下へと逃げて行った……

\*

地上の雑踏、木を隠すには森、僕たちは人々の群れへと身を隠していた。なれない感覚、こんなに沢山の人、ざわめきあう道、混雑する道路。

僕たちが起こした騒ぎは爆発事故として報道されていた。留置所にてガス爆発といった感じであろう。

向こう（おそらく警察のような組織だろう）は僕たちを探しているのは明らかだったが、この人ごみではそうそう発見できないようだった。しかし、僕たちも気を抜く訳にはいかない。頼みの銃の液晶にはこう表示されていた。

『充電中』

どうやら先ほどの一発でバッテリーが何かが切れたのか今は撃てる状態では無かった。

「それで市庁舎って？」

「あの一番大きな建物よ。見えるでしょう」

街の中心にそれは建っていた。しかし街から出るのに中心を目指すとはどういう事だろう。彼女に聞いても「今にわかるわ」としか返ってこなかった。

「なあ」

「なに？」

「この街、何かおかしいと思うのは気のせいだろうか」僕は何故か感じる違和感が彼女も感知しているかどうか聞いてみた。

「おかしいって、具体的には」

「そうだな、何か落ち着かないというか、現実感が無いというか。そうだな、まるで寝起きの直後みたいだ」そう、この夢のような感覚。

「多分、薬でも盛られたんじゃないの。あなた捕まる際に抵抗したでしょ」

彼女からの返答は何処か曖昧だった。僕のこのもややした感覚は晴れそうに無かった。水が僕の額に落ちる。いやな湿気だ。

そしてあと一つ気になる事があった。

「そうだ、この銃。どこで手に入れたんだ？」

「待って。……ここよ見つかったわ！」

「見つかった？何が」

「奴らによ！私は逃げるわ。上から来るの。」

空、いやこの建造物の天井を見上げる。すると落下してくる丸い物体が複数。それらは地上数メートルの場所で展開し、道路に着地した。二台の車が踏みつぶされる。セーフガードだ。

「兵器ノ使用ヲ許可サレマシタ。市民ノ皆サン、姿勢ヲ低クシテ避難シテクダサイ」

周りが騒然となる。当然周りの人間も、あまりの出来事にそう簡単には行動に移れず、その場に硬直していた。だがセーフガードはかわらず発砲しだした。目の前に居た人が一瞬でズタズタになった。どこかから悲鳴が上がる。市民は逃げ惑う。周りを素早く確認すると車を盾にし、応戦を始めた。

「奴らかわまわず撃ってくるぞ！」何人もの人々がなぎ倒される。

銃の液晶に目をやる。どうやら充電は完了しているらしかった。反撃する。銃から光弾が放たれ、セーフガードの一体の武装が吹き飛ぶ。つづけて引き金を引く。撃つ。次々にセーフガードが壊されてゆく。彼女はいい射撃の腕をしている。

「だめ、防ぎきれない」彼女が言う。

「どうしたんだ」僕が問う。

「地下に逃げるの」

地面に銃を向け出力を上げる。発砲し、出来た大穴から下水道へと身を投げた。

現在続きを執筆中

現在病気療養中のため更新が遅れます

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2041w/>

---

たとえそれが汚く壊れた物でも

2011年10月9日14時55分発行